

が抱擁すると奇跡的に村は再び姿を現し、「以後この場所は成光の秘密、そして私の秘密となった」と物語は結ばれている。

夜郎国（戦国・秦・漢時代に現貴州西北部・雲南東北部・四川南部・広西北部にあった少数民族の国）という地名、歌垣を連想させる歌を媒介とする恋の成就、シャーマンの舞踏を意味する「師公舞」、魂寄せの儀式などは、山中の村が少数民族（壮族がモデルと想定される）の集落であることを表している。だが、実在の少数民族を描くことよりも作者の筆は、物質的な欲望が渦巻く都市文化からの逸脱者を受けとめる理想郷と純朴な魂を持つ娘という「少数民族」らしさを描くことに向けられている。なお、沈從文の作品ではおもに少数民族同士の恋愛が民族の歴史や悲劇を絡めて語られ、沈從文自身が拘る独自の湘西の世界が描かれていた。

伝統的に理想郷を語る物語では、仙境へ迷い込んだ男性主人公が再び日常へ戻るパターンが多いが、この作品の主人公は日常生活を捨て、山中の村・仙境へ再び入っていく。このような物語の運びは、現代中国社会、都市に生活する人々の疲れを癒すであろう、今どきの青年と少数民族の娘という新鮮な組み合わせの純愛を上手く語り、この作品の大衆的な面白みとなっている。だが、蓮花が下着を着けないエロティックな身体を晒す場面など少数民族の女性に向けられる性的に偏った視線は、読者の庸俗な興味に迎合しすぎているように思われる。また、語り手と成光が所有する蓮花の待つ理想郷の「秘密」という構成は読者にファンタジーを感じさせるが、それと同時に男性の一方的な視線によって物語が構成されていることに気づかせる。

この作者は好んで現代社会のダメな男を描いているという指摘を例会で頂いたが、作者は確かに故意に「広西」ならではの物語を現代的にアレンジしていると言える。しかし、その軽妙な筆遣いは作者の器用さを現すと同時に、「広西」と「少数民族」はこのように娯楽の対象として安易に描かれてしまってよいのだろうかという疑問を読後に残す。

2) 森岡優紀「蘇童の中編小説『井中男孩』について」

（「会報」第18号合評より）

和田知久

本論文は「蘇童は小説という家をどのようにして建てていくのだろうか」という問題意識をもとに、蘇童の中編小説「井中男孩」を題材に「作家の創作方法に迫ろう」としたものである。

この小説をめぐるのは三つの「井中男孩」が存在する。蘇童による小説の「井中男孩」と、この小説の主人公の青年がある日書店で見つけたドイツ人作家ステファン・アンドレ

スの作品の翻訳本『井中男孩』、そしてその青年がこれを剽窃して書いた小説【井中男孩】の三つである。「この作品は蘇童の小説の中でも一風変わった小説で」、「入れ子式」構造をとっているのだと言う。

その三者の関係を森岡氏は次のように見ている。

この作品（「井中男孩」：評者注）には主人公の青年「俺」が創作している【井中男孩】が引用されている。「俺」と【井中男孩】との関係は、作品中ではあるけれども、「作家」と「作品」の関係でもある。蘇童の多くの短篇小説はこの小説中小説【井中男孩】と類似性をもっており、蘇童と自分の小説との関係が無意識のうちにこの「井中男孩」に反映されているのではないかと推測される。そこで、これを探ることによって、蘇童の小説世界が如何にして構築されているのかを理解するヒントが得られると考える。

つまり森岡氏は「俺」と【井中男孩】の関係を「作家」と「作品」の関係と見なし、それに、蘇童とその小説との関係との相似性を見いだそうとしているのである。

そして、三つのテキスト“井中男孩”を氏のいう「作家論」的方法でもって検証した結果、「小説からは作者の現実社会における生活、社に対する批判や感想などの具体的な細部がすべて省かれており、感覚だけが残っている。このような一種の抽象化と呼ぶべき方法こそがまさに蘇童自身の小説の作り方である」と結論づけている。

多作な蘇童の作品を多く読み込むのはそれ自体困難な作業であるが、それを踏まえて論を立てている点は評価できる。本論はこの一篇だけでなく、森岡氏の蘇童論全体の中で位置づけられるべきである。

作品の構造に着目し「作家が如何に作品と向き合っているか」という問題意識は、小説の叙述方式に積極的に取り組んだ先鋒作家である蘇童とその作品を考える上で重要であり示唆的であった。この考察は他の先鋒作家を考える上でも、八〇年代後半から九〇年代の中国同時代文学を考える上でも有益な参考軸となるべきものである。

ただいくつか疑問点も当日の参加者から出された。

本作品に限定するとしても、作中小説とその主人公との関係を、作品一般と蘇童という作家との関係として見做すことは有効であるのだろうか。作中小説もその主人公もともに蘇童の虚構である。その虚構の事物どうしの関係から、「作家が如何に作品と向き合っているか」ということを部分的に窺うことは可能であっても、作品一般と作家との関係を導き出すことは困難ではないかと思われる。

また、主人公「俺」にとってアンドレスの作品の持つ意味は、森岡氏が指摘するほど重要であり、意義深いものであったのだろうか。それよりも作家蘇童の関心は、文学青年の主人公「俺」が若さゆえ時に逸脱したり、自己実現できずに現実と理想の狭間に懊悩しつつも日々を生き抜く姿を描き出すところにあるように思える。主人公「俺」は、アンドレスの作品の「井戸を覗く少年」という設定に主人公自身の幼少時の体験を重ねただけであり、ただ剽窃の対象としてでしかアンドレスの作品をとらえていないのではないか。主人公「俺」は、作家となって名を成すために、自分も外国作家を剽窃しようと思い、どうせするならやり方が肝心で、あまり知られていない作家のものを剽窃するのがいいと思っただけではなかったのか。ただ、その目論見も編集者に見破られて潰えてしまうのであるが。

その他、瑣末ではあるが物語の設定の読み落としや引用の不手際と思われる部分も見られたのは残念であった。例えば、蘇童の小説「井中男孩」を論じる第三章での引用部分「今の社会って…でもみんな振りに過ぎないんじゃないの？」では、本来ひとまとまりの会話部分であるのになぜ最後の一文“誰也不敢暴露一点角落性問題”を訳出引用しなかったのだろうか。ここの夏雨と主人公の対話はむしろこの“角落性問題”をめぐるって交わされているのではないだろうか。「隅っこの問題（それぞれの個別的であって主要中心的ではない関心事）をさらけ出そうって奴は一人もない」ことこそがこの作品を読み解こうとする際、登場人物と現実生活とのかかわり方を検討するうえでも大切なポイントとなっていたのではなかったのだろうか。

また、数箇所にはわたり森岡氏の見解が示されているものの詳細については「注釈の拙論を参照のこと」で済まされているところがあった。紙幅の都合もあるだろうがせめてそれら論考の骨子だけでも示すことはできなかったのだろうか。読み手にとって興味深い部分でもあり、本論文の行論の要点となる部分でもあったため余計に残念に思われる。

3 月 例 会 (第 191 回)

(2005/3/19)

1) 陳桂棣・春桃『中国農民調査』(2004年1月人民文学出版社)

釜屋 修

発禁と伝えられたが状況は不明。農村における、私たちには理解不能の各種の奇体の税金の過酷な徴収、末端農村幹部の権力濫用、それに抗した正義漢と支持するが意識は低い村人。両者の間に対立が生じ、活動家に対する村のボス側からの殺人を含む凶暴な弾圧——解放前の話かと思わせられる非合理の封建的圧政に省クラス幹部の不誠実極まりない対応が絡む——が行われる。本書はその実態レポートである。